

KAWAII KEDO
SAIKYOU?

可愛いけど 最強っ

異世界でもふもふ友達と大冒険!

6

善 ありぼん 凶 中林すん



ドラちゃん
 エンシェントドラゴンの子供。人型にもなれる。

アイス
 レンの家族でモモッコルという魔獣。

ルリ
 珍しい青い鳥の魔獣。レンとの連携攻撃が得意。

レン
 気が付くと二歳児の姿で異世界にいた少年。異世界生活を楽しむために、悪の存在は許せません。

スノーラ
 レンとルリの保護者。本当は白い虎の魔獣だが人型にもなれる。元・勇者の相棒。

フーリ
 ずっと行方不明だった光の精霊。プローの友達。

プロー
 レンが誘拐された先で友達になった、闇の精霊。



Characters
登場人物紹介

第1章 お片付け開始!!

僕は長瀬蓮^{ながせれん}。普通の中学生だったんだけど、気がついたら、知らない森に一人でいました。

しかも、二歳児の姿で！

これからどうなっちゃうか不安だったんだけど、スノーラっていう白い虎^{とら}の魔獣に拾われたり、弱っていた青い小鳥を助けてルリって名前をつけてあげたり……それで、二人と一緒に住むことになりました。

それからルストルニアの領主さんの所に引っ越して、領主のローレンスさん、奥さんのフィオーナさん、二人の長男のエイデンお兄ちゃんに、次男のレオナルドお兄ちゃん、ローレンスさんが契約している魔獣のバディーと一緒に暮らすことになったんだ。

それからは色々あって……モモツコルっていうもふもふ魔獣さんと契約してアイスって名前をつけて家族になったり……あとは、大人のみんがエンって呼んでるドラゴンさんとその子供のドラちゃんとお友達になったり、女神のルルリア様からハリセンを貰^{もら}ったり、冒険者の依頼をしたり。

そんなある日、この世界をめちやくちやにしようとしてるディアブナスっていう悪い奴が、不完

全だけど復活しちゃったんだ。

それをやったのは、僕とアイスを誘拐した、コレイションっていう奴。

だけど僕は、一緒に捕まっていた闇の精霊のプロート、コレイションの部下として潜入していたハイエルフのユイゴさんと一緒に脱出。

それからスノーラ達と合流して、ルストルニアに攻めてきたディアブナスをやっつけたよ！

物凄く強かったから、街はポロポロ。それに街に張った結界の外では、ディアブナスが連れてきた魔獣がまだ暴れてるんだけどね。

でも、これで問題はほとんど解決！

あとは街を直して、ゆっくり過ごすんだ！

ということで、エンシエントドラゴンのドラゴンお父さん——スノーラ達はエンって呼んでます——と、カラス魔獣のカーズが、結界の外にいる魔獣を倒しに行ってくれたよ。

「さて、これからのことだが」

ドラゴンお父さんとカーズが攻撃を始めたのを確認して、スノーラが話し始めました。

と、それと同時に爆発音も聞こえてきます。

おお！今のドラゴンお父さんの攻撃で、またかなりの数の魔獣が吹っ飛んだ！

「まず我は、エン達が周りの魔獣達を倒したら、他にも面倒な奴らが残っていないか、街の周辺を確認してくる。その間、レン達のことを見てもらいたい……アーティスト、頼めるか？」

スノーラはそう言って、ハイエルフのアーティストを見ます。

「はい、問題ありませんよ」

「それと、安全を確認した後も、少しの間、街の周りの結界はそのままにしておく。まだ何かあるか分からないからな」

確かに、また悪い奴らが出てくるかもしれないからね。

それからスノーラ達は話し合って、これからの動きを決めていきます。

ローレンスさんは、騎士団長のスチュアートさんや他の騎士さん達と連絡を取り合って、街の中に敵が残っていないか、異常がないかを確認することになりました。お屋敷は壊れちゃったけれど、跡地に戻って、そこで指示を出すって。

それから、フィオーナさん達はそれとは別で動くみたい。冒険者さん達にも手伝ってもらうんだけど、その冒険者さん達に指示を出すのは、フィオーナさんとメイドのアンジエさんがやるんだって。

あと、ハイエルフのユイゴさん達も、街の確認をしてくれます。人間だと分からない、ちょっとした変化を感じることができるハイエルフさん達。もちろんローレンスさん達だって、しっかりと

街を確認するけど、気配とか悪意とかは感じられないから、一緒に協力してくれるんだ。

まあ、ディアブナスやコレイションくらいの相手だったら、ローレンスさん達も、さすがに嫌な感じは分かるだろうけど。

そうそう、スノーラがね、まだ隠された地下があるかもしれないから気をつけるって、ユイゴさんに言っていたよ。

ギルドマスターのダイルさんは、このままこの場に残って、ディアブナスを封印した魔法陣を見張ってくれるんだって。関係者以外は近づけないようにするみたい。

街が安全だって確認ができれば、避難していった住人達には戻ってきてもらいます。

一応、ここには近づかないようにする予定だけど、もし誰かが来たら、ダイルさんが説明してくれるんだって。

バディー達、ブラックパンサー達は、それのお手伝いと見張りです。

そして僕達だけ……

うん、ちびっ子の僕達にできることなんて、ほぼないからね。

とりあえず今は、みんなの邪魔にならないように、スノーラやドラゴンお父さんやカースの応援でもしようかな？

あとは、その時々で、何かお手伝いできればいいよね……うん。そうしよう。

スノーラが今どこどこに誰がいるって、ローレンスさんやフィオーナさん達に伝えていきます。

それを聞いたローレンスさん達が動き始めて、ユイゴさん達と、ハイエルフのお友達の鳥魔獣セイクリッドバードのイルランド達も動き出そうとしたよ。

でもイルランド達は、振り返って僕達に手を振ってから歩き始めるものだから、僕は一匹ずつ全員に、手を振り返すことになっちゃったんだ。

全員一緒に手を振ってくればいいのに、どうして一匹ずつ？ みんな嬉しそ^{うれ}うだからいいけどさ……

「よし、では我々も動くか」

「ダイル、ここは任せるぞ」

「ああ、何かあればすぐに連絡する」

僕達とローレンスさんとお兄ちゃん達は、みんなで壊れたお屋敷に移動。

近道を通ったから、すぐにお屋敷に着きました。もちろん僕はお兄ちゃんの抱っこね。じゃなきゃこんなに早く着かないよ。

そして、戻って改めて見たお屋敷は……壁が少しだけ残っている、やっぱりボロボロの状態でした。

僕が覚えていたボロボロのお屋敷よりも、さらにボロボロになっていたんだ。

僕達が、封印の魔法陣がある場所に移動してから、さらにディアブナスの攻撃を受けて、こうなったみたいだよ。

「ぼりよぼりよ」

『僕達が隠れてた壁もなくなってる』

『穴はのこってるなの？』

穴っていうのは、ディアブナスの攻撃のせいで、お屋敷の真ん中に開いちゃった穴のことね。僕達が落っこちちゃった穴だよ。

『見てくるよ！』

ブローがさっと飛んでいって、穴があるだろう場所を何回か旋回した後、すぐに戻ってきました。『相変わらずの大穴だよ。下に嫌な奴が残ってないか、僕が見てこようか？』

「ならば我也行こう。お前だけでは心配だからな」

すぐにブローがスノーラの頭に乗って、穴に入っていきます。

と、その時また、向こうの方で大きな爆発音が聞こえたんだ。

「いまのもの、おとうしゃんどりゃごとと、かーしゅのこげき？」

「うん、そうだよ。今の攻撃で、半分くらい魔獣をやっつけたから、あと少しで帰ってくるはず。

お父さん達、凄いよね」

人間の姿のままのドラちゃんがそう言いました。

さすがのドラゴンお父さんとカース。

これなら、本当にすぐに、全魔獣を倒しちゃいそうだね。

……そういえばカースって、どんな攻撃をしているのかな？

ドラゴンお父さんは、強い魔法を放てるのを知ってるから、さつきから何回も爆発音がしているのはドラゴンお父さんの攻撃だと思うんだけど。

カースも同じような魔法かな？ それとも、カースのあの速い動きと魔法を合わせて攻撃？ さつきディアブナスに攻撃したみたいなのやつね。

それか、ルリみたいに引っ掻き攻撃してたりして……まさかね？

「それにしても、今更だが酷い有様だな。屋敷を修復するだけで、どれだけ時間がかかるか。いや、これは修復じゃなく、建て替えだな」

「そうだね。多少何かが残っているって言っても、これじゃあ」

「おっ、俺のトレーニングの道具が無事だ」

ローレンスさんとエイデンお兄ちゃんが真剣な顔でお話したら、レオナルドお兄ちゃんが嬉しそうな声を上げました。

「レオナルド、今はそれどころじゃないだろう」

エイデンお兄ちゃんが呆れる横で、ローレンスさんが周りを見回します。

「街の被害の報告はこれからだが、私達がここまで通ってきた場所は、ほとんど被害がなかったな」

「はい」

「このまま街全体の被害が少なければ、こちらに力を入れられるんだが」

そう、みんながお話している時でした。

「旦那様!!」

向こうの残っている壁の方から、ローレンスさんを呼ぶ声が聞こえてきます。

そっちを見たら、お屋敷で働いている使用人さん達がぞろぞろと、壁の後ろから出てきたんだ。

「皆、無事だったか！ 怪我人は？」

「大丈夫です。怪我也擦り傷程度で、問題はございません。すぐに動けます！」

「そうか。これからのことだが、そのうちフィオーナ達から報告がくる。その報告次第では優先事項は変わるが、それまでは屋敷の片付けをしていてくれ」

「はい!!」

ふう、みんな無事でよかった。それに大怪我した人もいないって。

使用人さん達はローレンスさんに言われて、すぐに壊れたお屋敷の方へ戻ります。

そして魔法を使って、瓦礫を片付け始めました。

風の魔法で物を持ち上げたり、大きすぎる物はわざとさらに壊して運びやすいようにしたり。

そうだ！ 僕達も街の安全が確認できて、スノーラ達の応援も終わったら、その後はみんなと一緒に片付けをしよう！

本当に小さな物しか運べないかもしれないけれど、少しでもお手伝いしたいし。

「にえ、るりい、あいしゅ、どりゃちゃ」

『なあに？』

「あんじえんわかっちゃら、ぼくたちも、おかたじゆけによおてちゆだい。ど？」

『それいいなの！ お手伝いなの！』

「うん、みんなでお片付けした方がいいもんね」

僕達のやること、決定です。

と、僕達は何をするか話し合っているうちに、スノーラとブローが穴から戻ってきました。スノーラの光魔法で、隅々まで見てきたって。

「どうだった？」

「何も問題はない。誰かが隠れている気配も全くしないからな。穴は大丈夫だろう」

「そうか、よかった。よかったが、後はどうやってあの大きな穴を埋めるかだな」

「それならば、我が塞いでやろう。中に落ちてしまっている家具なども、問題がなければ一緒に埋めてしまおうが、どうだ？」

「本当か!? それはありがたい！ それなら一度中を確認してから、必要なものがあれば引き上げるように頼む」

穴は安全……もの凄く大きな穴だから、間違えて誰かが穴に落ちるかもしれないし、安全ってことはないけど。

でも、とりあえずは、悪い人達や攻撃してくる魔獣はいないことが分かったから、これからローレンスさんや執事のケビンさん、使用人さん達が穴を確認するって。

多分、そのまま使える物は残っていないだろうけどね。それでも、少しでも使えそうな物は引き上げたいみたい。

これから色々な物を修理しないといけないからね、その材料にするんだろうな。

それから、今使用人さん達が片付けている物に関しても、使えそうな物と使えない物に分けて、要らない物は穴に入れられるだけ入れます。

そうしてゴミの仕分けが終わったら、スノーラに穴を塞いでもらおうんだ。

だから穴に入れるのは、ちゃんと土に還る物だけね。少しでも、ゴミを少なくしたいみたい。

それにしてもスノーラ、あんなに大きな穴をどうやって塞ぐのかな？

塞ぐ時は見せてもらおう。

スノーラが虎の姿に戻って、ローレンスさんとケビンさんを背中に乗せます。使用人さんは風魔法を使って連れていくって。

スノーラは、自分が背中に乗せてもいいって思う人しか乗せないからね。でも、他の使用人さん達も、いつぺんに運んじやいたいから、それには風魔法が早いって。

すぐに使用人さん達を風魔法で包んで、そのままみなで穴の中へ入っていったよ。

僕達は片付け開始。

でも、邪魔にならないように、使用人さん達が少ない場所で片付けをします。エイデンお兄ちゃんとレオナルドお兄ちゃん、アーティストさんも一緒だよ。

エイデンお兄ちゃんは丁寧ていねいに物を動かして、それが使えるか確認しながら片付けていきます。

丁寧でも速いんだよ。サツサツサってどんどん片付けちゃうの。

レオナルドお兄ちゃんは、ドッシャン、ガラガラ!! って、凄く大きな音を立てながら、大雑把おおざっぱにお片付けします。

でもびっくりなことに、大雑把にやっても、それ以上物が壊れないんだよ。それに、ちゃんと仕分けもできているの。凄いよね。

アーティストさんは、お兄ちゃん達が手の届かない所の物を、弓で取ってお片付けです。

あの、矢で引つ張るやつね。矢が刺さった物を引き寄せる魔法です。

どんなに大きな物でもシュンシュンッ！ と取っちゃうんだ。

それからね、大きなテーブルを取った時が凄かったです。

お兄ちゃんに、脚あしの部分は外して、上の板の部分だけ取っておいてほしいって言われたんだけど。お兄ちゃんや使用人さん達は、魔法や道具を使って取り外しているのに、アーティストさんは素手でバキバキバキッ!! って取り外したんだ。

僕もルリ達もお兄ちゃん達も、思わずじっと、アーティストさんを見ちゃったよね。

だって、あの大きなテーブルは、脚が僕の腕の何倍もある太い脚だったのに、それを素手でなんてね……

エイデンお兄ちゃんは目を丸くします。

「ア、アーティストさん凄いですね。魔法も道具も使わずに取り外すなんて」

「そうでしょう？ ユイゴ様は私よりも力が強いですし、里の者も私と同じくらいには」

それを聞いて、レオナルドお兄ちゃんも興味津々です。

「へえ、そうなんだ。何か特訓してるのか？ じゃなかった、特訓してるんですか？」

「いいえ、特には」

「ええ!? 俺なんて毎日特訓してるのに……」

特訓かあ。僕も、もう少し大きくなったら、魔法の練習したいなあ。それに剣も……使えるかどうかは別だけどさ。

と、今はお片付けだよ。考えるのはあと。

僕達はみんなで一つずつ、しっかりと片付けていこう！

「りゅり、あいしゅ、ぶりよ、はじめっちえ」

『持った!!』

『持ったなの!!』

『こっちもいいよ!!』

「しえーによ!!」

みんなで何かの板を運びます。

とつても小さい板だけど、今の僕達にはこれが精一杯。

ちなみにドラちゃんはやっぱりドラゴンだね。一匹で、お兄ちゃん達よりも大きな物を、ヒョイヒョイ運んでいるよ。

「レン、みんなも、それは使えそうだから、こっちに持ってきてくれる？」

「うん!! よいちょよ、よいちょ」

『みんな、頑張る!!』

『重いけど頑張るなの!!』

『魔法で少し軽くするよ!』

エイデンお兄ちゃんの所に運んで……と。

ふう、最初の板はなんとか運べた。

さあ、次々。

次はあつちの、何に使っていたか分からない、小さな椅子でも運んでみる？ 引っ張れば何とか運べないかな？

近づいて確認すると、その小さな椅子は、どこも壊れている感じはしません。

これ、どこに置いてあったのかな？ 今の僕にピッタリサイズの小さな椅子。

あつ、向こうにも、同じような小さな椅子が落ちていた。

僕達が椅子を見ていたら、レオナルドお兄ちゃんが近づいてきて、椅子を見て「ああ」って言いました。

「これ、まだ取ってあったんだな。これは俺と兄さんが、レンと同じくらい小さい時に使っていた椅子だ。こつちのペガサスの模様が彫ってある方が兄さんので、ドラゴンの模様が彫ってあるのが俺のだ」

お兄ちゃん達の小さい時の椅子。

ローレンスさん達が二人の思い出になって、大切に取っておいたのかな？

それなら、椅子は壊れてないから、また大事にしまっておいた方がいいよね。

スノーラが戻ってきたら、持っていてっってお願ひしよう。それでお屋敷が直ったら、新しい物置かどこかに、またしまうの。

そう、お兄ちゃんに聞こうとした時だったよ。

人型に戻ったスノーラとローレンスさんとケビンさんが戻ってきたんだ。

「他のみんなは？」

「ああ、穴の中に残って、作業してくれている」

「穴が崩れないように、穴の壁と、周囲を強化して戻ってきたから問題はない」

エイデンお兄ちゃんへのローレンスさんの返事に、スノーラも頷きます。

「そうなんだ」

「こつちはどうだ？ これからなんだが……って、お前達の椅子か!? 懐かしいなあ。二人ともこの椅子をとても気に入っていて、大きくなって座りにくくなっても、しばらくはこの椅子を使っていたな」

「奥様が無理矢理お替えになった時は、物凄くお泣きになって大変でしたからね」

ローレンスさんとケビンさんがそう言うと、レオナルドお兄ちゃんが首を傾げます。

「そうだったけ？ 俺泣いたっけか？」

「凄い勢いで泣いてたよ。それで元に戻したら、その日から少しの間、椅子を抱きしめて寝てたんだから」

エイデンお兄ちゃんが少し笑いながら言うと、ローレンスさんも笑いました。

「エイデンも、お風呂の時でも、離そうとしなくて大変だっただろう」

「あれ？ そうだったけ？ 確かにずっと持って移動していた気はするけど。とても座り心地がよかったのは覚えてるよ。お尻がフィットするって言うか」

「そうそう、俺もそれはハッキリ覚えてるぜ。本当、何でかは分からないけど、体にフィットするんだよな」

へえ、そんなに座り心地がいい椅子なんだ。

あのね、スノーラが洞窟で用意してくれた、遊び場に置いてあった椅子があっただけで、それもとっても座り心地がいいんだよ。

洞窟の近くに住んでいた蜘蛛の魔獣に、いろんなことに使える糸を出してもらってね。スノーラは、その糸を使って袋を作った後、中に木の葉や花のワタを詰めて、クッションを作ってくれたんだ。

それから、僕とルリにびつたりの大きさの丸太を用意して、その上に出来上がったクッションを

載せて椅子の出来上がり。

ふかふかで肌触りもとてもよくて、丸太のサイズもちょうどよくて、僕達の大好きな椅子だったんだ。

ただ、ローレンスさんのお屋敷に来る時に、いつでもどこでも用意できるからって、丸太は洞窟に置いてきて、クッションだけ持ってきたの。

そういうえば、そのクッションは僕達の部屋のソファーに置いておいたんだけど、どうしたかな？ お屋敷ポロボロになっちゃったし、なくなっちゃったかな。

僕は戻ってきてスノーラとルリに聞いてみました。

「しゅによー、あなに、ぼくとりゆりの、くつしよんあっちゃ？ しよれともりゆり、おへやかりや、もってきちゃ？」

僕とアイスは、途中までコレイションに捕まっていたでしょう。その間にルリが、おもちゃや必要な物を回収してくれた、という話は聞いています。

でもさすがに、クッションは大きくて、運べなかったと思うんだよね。

『大丈夫、クッション持ってきた。フンツ!! って力いっぱい運んだら運べた。スノーラが持ってる』

「ほんちよ!? ありがちよ!!」

ルリ、自分の何倍もあるクッションまで回収してくれていたなんて。

『どこもやぶけてなかった。よかった。でもかなり汚れてるからすぐに使えない』

「ああ、そうだったな。だが問題ないぞ。我が綺麗きれいにしてやろう」

スノーラが、魔法の空間からクッションを取り出し、僕に見せてくれたよ。

そうしたらルリの言った通り、クッションは壊れていなかったけど、物凄く汚れていたんだ。

でもスノーラが魔法を使うと、クッションをシュルシュルと薄い緑色の光が包みます。

その魔法から出てきたクッションは、新品みたいに綺麗になっていたよ。

「これでいいだろう？」

「ありがちよ!!」

それからスノーラはルリとアイスのクッションも出して、綺麗にします。

『ありがちよ!!』

『ありがちな!!』

そうそう、アイスのクッションもあるんだ。

この街に来てから、スノーラがペガサスのブラックホードさんに、蜘蛛魔獣さんがいないか聞いてくれたの。

そうしたら、ブラックホードさんのお友達に、森にいたのとは同じ種類じゃないけど、同じよう

にいい糸を出してくれる別の蜘蛛魔獣さんがいてね。

その蜘蛛魔獣さんに糸を出してもらって、ささつとアイスのクッションを作ってくれたんだ。

だからみんな蜘蛛魔獣さんとスノーラ作の、気持ちいいクッションを持っています。

ぎゅつとクッションを抱きしめる僕達。

そしたら、ブローが僕達の周りをフラフラして、『いいないいなあ』って言います。

『僕も欲しいなあ。あいつとお揃いで欲しいなあ。ねえスノーラ、あいつ探してくれるんでしょ？ スノーラ達が探してくれたら、絶対見つかると思うんだ。だからあいつが見つかったら、僕達にもクッション作ってよ』

あいつ？ ブローが前に言っていた、お友達のことだよ。

「分かった。必ずお前の友は探し出す。それにクッションも作ってやるから耳元で騒ぐな。こここの目処が立ったらすぐに探そう」

『ありがちよ!!』

『スノーラ、僕にも作って』

「ドラ、お前もか」

『うん、だっていつも、気持ちよさそうだなって思ってたの。お母さんは何でも作ってくれたけど、お父さんはそういうの全然ダメなんだ』

「分かった、ドラのも作ってやる」

二人とも、よかったね。

と、僕達を見ていたローレンスさんが椅子を手にとって、それから全体的に確認し始めたよ。

そうだ！椅子をスノーラにしまってもらおうと思っていたんだ。

「えちよ、いしゅちまう？ しゅによーに、もつちえちえもりやう？」

「ん？」

だから、椅子しまっておく？ って、ローレンスさんに聞きました。

だって、お兄ちゃん達の大切な思い出の椅子なんでしょう？

でも、ローレンスさんはいまいち僕の言葉が分かっていないので、代わりにアーティストさんが、僕の言いたかったことを伝えてくれます。

「ああ、そう言っていたのか。では頼めるか？ しまえばなしになっていたが、せっかく残って

くれたんだ。大切な思い出の品だからな。フィオーナにも見せたいし」

「うん！ しゅによー、いっちょにちまって」

「分かった。他に必要なものがあつたら、また言ってくれ」

そうだった。今は、お片付けの最中。

すぐに、スノーラにしまってもらって、お片付けを再開！

それからは、何回かフィオーナさん達やスチュアートさん達、副ギルドマスターのスレイブさん達がローレンスさん達に、街の状況を報告しに来たり、ユイゴさん達もスノーラの所に来たり……僕達も、だんだんとお手伝いに慣れてきて、最初よりもしっかりお片付けができるようになってきました。

そうしてみんながまた、街の中へ散らばっていった頃。

今までずっと聞こえていた、街を守ってくれている結界の外の爆発音が、聞こえなくなつたんだ。ドラゴンお父さん達の攻撃が止まったのかも。

空を見上げる僕達。

あつ！ 向こうの方、トカゲみたいなドラゴンみたいな魔獣が飛んでいった！

それにあつちには、大きなワシみたいな魔獣が飛んでいったし。

……なんか焦^{あせ}って逃げている感じ？

「あつ！ お父さんが今追いかけていったよ。お父さんは、悪い魔獣は一匹も逃さないからね。それに、もうほとんど魔獣はやつつけたから、もうすぐ戻ってくるよ」

ドラちゃんがそう言いました。

それでしばらくしたら、ドラちゃんが言った通りに、ドラゴンお父さんとカースが帰ってきました。

街を囲っていた魔獣も、逃げた魔獣も完璧に全部倒したって。

二人ともありがとう!!

『全て、この屋敷の外壁の方に重ねてある。落ち着いたら、あれで何か作ってくれ』

「ああ、もちろんだ。ケビン、後で確認を」

「かしこまりました」

『いやあ、結構珍しい魔獣もいたねえ。人間の世界では、高級食材とされている魔獣達もいたし。レン達も食べるの楽しみにしてるよ』

カーズが嬉しそうにそう言います。

「こぎゅ？」

『確かそうだったはずだよ。前にスノーラについて冒険者ギルドに行った時に、その魔獣を出したら、凄い騒ぎになったんだ。挙句、誰がその食材を手に入れるかで、かなり揉めてね』

カーズが思い出すように言うと、スノーラが首を傾げます。

「どれのことだ？ 毎回何かしら騒がれたからな。ふむ、この片付けを終わらせる前に、見に行きながら、ちよつと食べてくるか」

『ほう、それはいいな』

待つて待つて、スノーラ。今はお片付けの時間だよ。何一人で食べに行こうとしているの。

それにドラゴンお父さんまで。ちゃんとみんなで食べるんだからね！

「しゅー、めっ！」

慌ててスノーラ達を止めます。

ルリ達も止めてくれたよ。『大人なのに』って言ってね。

それで、何とか止まったスノーラ達。

ただ、それからが凄かったんだ。

ローレンスさん達や使用人さん達は、魔法を使っているでしょう。魔法のない、地球に住んでいた僕にしてみれば、物凄い勢いで片付けをしていたわけ。

でも、スノーラ達、魔獣グループは……

ローレンスさん達の三倍くらいの速さで動いていたんだ。

……ううん、それ以上かも。

だって、どんなに大きな物でも一瞬でバラバラにしたり、捨てる物が消えたかと思うと、瞬間移動したのかってくらいのスピードで、穴の上に移動したりするんだ。

しかも、そのまま穴の中に落ちていったと思ったら、またすぐに戻ってくるんだ。

魔法の威力がみんなと全然違うから、一度に広範囲の物を動かすことができるの。

さっきなんて、スノーラとドラゴンお父さんが同時に魔法を使ったら、お屋敷の三分の一のゴミ

が、ほぼ一瞬で片付いちゃったんだ。

こんな感じに、物凄い勢いで片付けてくれたから、お屋敷だけじゃなく、その周囲の片付けも、あつという間に残り三分の一くらいになったよ。

どれだけ魔獣を食べたいのか……

僕達も、スノーラ達を尻目に、ちまちまとお片付けをしたよ。

だって、どう考えても、スノーラ達みたいにはできないもん。

そして、そのちまちまお片付けの最中に、僕はブローに、ブローがずっと心配していたお友達のことを詳しく聞きました。

ブローのお友達は光の精霊のフリー。

ブローは闇の精霊だけど、光の精霊とお友達なんだって。

ブローとフリーは遠くに住んでただけで攫さらわれて、この街へ連れてこられてすぐに、別々にされちゃったんだよね。

ブローの話だと、フリーはどうもジャガルガに連れていかれたみたい。

そういえば、コレイション達とジャガルガは手を組んでいたけれど、最後は仲間割れをして別れたって言っていたよね？

そのゴタゴタの時に、ジャガルガがフリーを連れていったのかな？

『ディアブナスがいなくなつて、スノーラ達も気配をしつかりと感ずることができるようになつたから、すぐに見つけてくれると思うんだ。ただ、スノーラ達はフリーの気配を知らないからね。あつたかい気配だよとか、どんな気配なのか教えないと。手分けして探すかもしれないし、その時僕がいなくても、分かつてもらえるようにね』

「フリーを連れていった奴らが、まだこの街にいるとは限らないもんね。僕達がディアブナス達と戦っているうちに、どこかに行っちゃったかもだし」

ドラちゃんがそう言うと、ブローは頷きます。

『うん、そう。でも、もう邪魔をするディアブナスはいないからね。少しでもフリーの気配が見つかれば、すぐに助けに行けるからよかったよ』

「ふーり、ぶりよーといちよ？　ちちやい？」

『うん、僕と同じ大きさだよ。色は黄色と白。白の方が強いかな？　それから飛ぶとね、飛んだ跡がキラキラして綺麗なんだ』

『キラキラなの？』

『そう、キラキラ。僕達精霊や、僕達みたいに小さい魔獣達には、キラキラの道みたいに見えるかも』

ブローの言葉に、僕達は大盛り上がり。

『キラキラの道、綺麗！ ルリ見てみたい！』

『アイスもフリーに会いたいなの!!』

「僕もだよ!!」

「ぼくも！ しよれで、みにゃともだち！」

『うん！ フーリは最初もじもじして、すぐには遊べないかもしれないけど、でもきつとみんな友達になれるよ!』

たのしみだなあ！

お片付けが終わったら、カースが言っていた高級魔獣食材でご飯を作ってもらおう。それでスノーラ達に力をつけてもらったら、みんなでフリーを助けに行こうね！ その前に見つけられたら、すぐに助けに行くし！

話をしているうちに、フィオーナさん達とスレイブさん、それにスチュアートさん達が報告に戻ってきました。

それで、話を聞いていたんだけど、ちょっとびっくりすることがありました。

あれだけディアブナス達と激しい戦いをしていたのに、そして、魔獣達も時々入ってきて戦っていたのに、壊れた建物はほとんどなかったみたい。

完全に壊れた家屋はゼロ、半壊した建物は五つ。そして少しだけ壊れた建物は十。その十軒に関

しては、もう修復まで終わらせたらいいんだよ。

家の中に入らなくても直せるくらいの壊れ方だったから、その住民にいちいち許可を取らないでささっと直しちゃったみたい。どうせ直すんだからいいだろうって。

それにしても、本当にあれだけ激しい戦いだったのに、よく被害がそれだけで済んだね。

というかもしれない、一番ダメだったのはローレンスさんのお屋敷？

少し残っていた壁も今は片付けられて、あと少しすれば更地になるくらいまで、片付けは進んだけどさ。

「そうか、それはよかった。ならばすぐにでも避難している住民達を呼び戻そう。使えなくなってしまう建物については、その持ち主に話を聞いて、新しく建てるか、他の空き家に移動してもらおう」

「では私が」

スチュアートさんがそう言います。

「スチュアートの部隊と、もう一部隊連れていけ。スノーラ達が、もう大丈夫と言っているから問題ないだろうが、一応な」

もしかしたら、急に魔獣が出てくるかもしれないからね。きつと大丈夫だと思っけど。

「はっ！ では」

スチュアートさんがすぐに動きます。

それからフィオーナさん達もまた動き始めて、僕達も最後までちゃんと片付けをしたよ。あんまり役には立ってなかっただろうけど。

そして片付けを始めて二時間もしないうちに、お屋敷のあった場所はただの更地になったんだ。ゴミが一つもない、綺麗な更地を見る僕達。

「にやにも、にやい」

『うん、とっても綺麗になった』

『全部穴に入ったなの？』

「あれだけいっぱいゴミがあったのにな？」

『あれ？ そういえばドラのお父さんが、ゴミを向こうに持っていったような？』

僕とルリ、アイス、ドラちゃんがそう言う側で、ブローが首を傾げています。

みんなの言う通り、ローレンスさんのお屋敷はとっても大きかったから、いくら使える物と使えない物を分けたとしても、全部のゴミが穴に入るわけありません。

だから入らなかった物は、別の場所を集めておいたんだけど……

そのゴミが、今はどこにもありません。

僕達は、穴を塞ごうとしているスノーラに、ちよつと待ってと声をかけます。

それから、スノーラに洋服を掴んでもらったり、体を掴んでもらったりして、みんな穴を覗きました。

そうしたら、穴には、もうこれ以上は入らないってくらい、びっしりみっちりゴミが入っていたよ。

でも……やっぱりゴミは、これだけじゃなかったよね？

「しゅによし、ごみ、こりえだけ？」

『もつとゴミあった？』

『どんどんゴミ運んでたなの』

僕達がそう聞くと、スノーラが不思議そうにします。

「ん？ 他のゴミのことか？ それならばエンとカースが運んでいったぞ。穴に埋めるゴミと、あつちに使うゴミで分けたら、ちよつどいいくらいになつてな。全て綺麗に片付きそうではなかった」

やっぱりブローが言ってた通り、ドラゴンお父さんが持っていったんだ。

でも、あつちに使うゴミ？ 使うって何に使うの？

それに、『使う』なら、ゴミじゃないんじゃない？ 使えるなら、使える方に分類しなくちゃダメだよ。

スノーラに聞こうとする僕。

でもスノーラはすぐに、穴を塞ぐ作業を始めようとします。

ここにいたら邪魔だから、僕は後ろに下がったよ。

スノーラが手を挙げると、少しだけ地面が揺れます。

そしたらその後、砂みたいなのがパラパラと空から降ってきました！

そして初めのうちは、僕達の周りや他の人達の周りを、ヒューヒュー吹いていたんだけど……だんだんとスノーラの頭の上に集まって、最後は竜巻みたいになったよ。

「では、埋めるぞ。ローレンス、いいな？」

「ああ、頼む」

最後に、ローレンスさんに確認を取るスノーラ。

そしてローレンスさんが頷くとすぐに、竜巻みたいなのがヒュルルル、シュルルル!! と穴の中に入っていきました。

それで少しすると、スノーラが手を下ろしたんだ。

でも竜巻みたいなものは消えないまま。

これでいいの？

ちよっと心配になって、僕達の所に戻ってきたスノーラに聞いてみます。

「まほ、きえてにゃい。だいじよぶ？」

「ああ、穴が消えれば、勝手に魔法も消えるから大丈夫だ」

そう言われて、じつと穴と竜巻みたいなものを見つめる僕達。

そしたら、竜巻みたいなものが少しずつ動いていることに気付いたよ。

それで、その通った後ろの所は、土が被っています。

そっか、これで少しずつ埋めていくんだね。

それから数分で、スノーラの言った通り、竜巻みたいなものの威力が収まってきます。

最後、ふわふわの砂が穴に向かって飛んでいくと、竜巻みたいなものは完全に消え、穴もしつかりと塞がりました。

綺麗な更地になったよ！

スノーラが、穴があった場所に立ち、足で軽く蹴ったり、手で払ってみたいりします。

「ふむ、しつかりと埋まっているな。これならば問題ないだろう」

「スノーラ、助かった。我々だけなら、この穴を埋めるだけで、どれだけ時間がかかったことか。それに片付けも、スノーラ達のおかげで予定よりもかなり早く終わることができた。これならば、すぐに屋敷の立て直しに入ることができる」

ローレンスさんがそう言って、頭を下げます。

「気になるな。レン達のためでもあるからな。それじゃあ、我はエン達の様子を見てくる」

「外にできた魔獣の山の所に行っているんだったな」

「そうなの？ そっちに使えるゴミを持っていったのかな。」

「何をしてらんだろう？」

「そうだな、さっきケビンにも頼んだが……エイデン、一緒に行つて様子を見てきてくれるか？ スノーラ、エイデンも一緒にいいか？」

「ああ」

それを聞いた僕達は、すぐに手を上げてびよんびよんとジャンプし、アピールします。

僕も!! 僕も行くよ!

だつて、どのくらいの大きな魔獣の山ができているか気になるし、どんな魔獣がいるのか見たい!

街を埋め尽くしていたんだから、いろんな種類がいたはずでしょう？

「しゅによー! ぼくいちよ!!」

『ルリも行く!!』

『ボクもなの!!』

「僕も行きたい!!」

『僕も行くよ!!』

「分かった分かった」

面倒くさそうに言うスノーラ。

すぐにスノーラが魔獣の姿になって、みんなでスノーラの背に乗ります。

そして、エイデンお兄ちゃんとアーティストさんに支えてもらつて出発!!

……つて、まあ、すぐに着いたけどね。

だつて置いてある場所は、お屋敷の裏の、街の壁の所。ほぼ一瞬で着いちゃつたよ。

そして僕達の目の前には……

「おによおおお……」

『びゆによおおお……』

『みによおおおなの……』

「うんうん。やつぱりお父さんは凄いなあ」

『これだけでも、簡単にやられるんだから。あいつが消えた時、すぐに逃げればよかつたのに、バカな奴ら。でも、僕達のご飯になるからいつか』

ドラちゃん、ブロー……これを見た感想はそれなの？ 僕達の反応の方が、合っていると思うんだけど。

エイデンお兄ちゃんなんて、何も言わずに固まっているし。

だって僕達の前には、外壁の高さと同じくらいの高さの大きな魔獣の山が、二つもできていたんだから。それと、その半分くらいの山もあるから、全部で三つだね。

『お、来たか。どうだ？ 結構美味い魔獣が多いだろう』

いつの間にか僕達の後ろに来ていた、ドラゴンお父さんとカース。

「そうだな、戦っている時は、確認どころではなくて、どんな魔獣が来ていたのか分からなかったが。これならば、当分美味い飯が食える」

僕はどれが美味しいと分からないけど、僕達を背中から下ろして人間の姿になったスノーラが、どこか嬉しそうにそう言いました。

魔獣の山に近づく僕達。

恐竜みたいな魔獣に、トカゲを大きくしたような魔獣。

蛾を大きくしたような魔獣もいるし、大きな蟻の魔獣。それから、大人よりも大きなカマキリでしよう。昆虫系の魔物も色々な種類がいるみたい。

あとは、鋭い牙を持った豚に、背中に棘のあるキリンみたいな魔獣。

他にもたくさんさんの魔獣達がいたよ。

たくさんいたのは分かっていたけれど、まさかこんなにいたなんてね。

……それに、姿だけ見ると、そんなに美味しそうに見えないんだけど。

蟻とかカマキリとかに似ている魔獣なんて、ただただ硬そうだよ。

「しゅによし、こりえ、たべりえりゅ？」

「ああ、ほとんどな。まあ、人間の口に合わないものもあるが、ほとんど大丈夫だぞ。そうだな、この岩トカゲなんかは……」

スノーラが、一番近くに置いてあった、なんかとつてもゴツゴツしている、大きなトカゲを片手で持ち上げて、そのままドシンツ!! と僕達の前に置きます。

その反動で地面がちよつとだけ揺れて、よろよろする僕達。

すぐにアーティストさんが支えてくれたよ。

このトカゲ魔獣の名前は、さつきスノーラが言っていたけど、岩トカゲ。

その名の通り、頭の前からしっぽの先まで、全身の皮膚が岩で覆われていて、大きさはコモドオオトカゲの三倍くらいかな。

スノーラによると、なかなか珍しい魔獣で、冒険者ギルドでは高値で買い取ってもらえるんだって。

全身岩だから、狩るのがとつても難しい。

仮に狩れたとしても、今度は重すぎてギルドまで運べない可能性もある。

だからといって、普通の冒険者が持ち歩いているような道具じゃ、その場で解体することもできない。

……という感じで、まず、持ち帰るのが大変。

スノーラやドラゴンお父さん達みたいに、すぐに倒せたり、力持ちだったり、荷物を簡単にしまえば別だけど、やっぱり普通の冒険者が持ち帰るのは難しいみたい。

もちろん、普通の人でも、簡単に運ぶ方法があります。

ほら、あの何でも入っちゃうカバンね。あれの、もっといっぱい入るバージョンがあつて、それを持つている人達だったら簡単に運べるんだよ。

ただ、そういうカバンはとっても高いから、持っている人は少ないって。

と、まあ、なんだかんたんで、岩トカゲを冒険者ギルドに運ぶことができた場合は、扱いやすい特別なナイフを使い、岩トカゲを解体するそうです。

岩の皮膚は防具になって、お肉の部分はレストランが買い取ったり、狩った人がそのまま持って帰ったりするんだ。

ただ、岩トカゲのお肉は、少ししか取れないのにとっても美味しいから、かなりの高値で売れるみたい。だから売る人の方が多いんだって。

岩の皮膚も、持ち帰るのが大変なぶん、高値で取引されるみたいだよ。

「まあ、我らは嘔み砕いて、そのまま食べればいだけだから問題はない。が、レン達はそうもいかないからな。そうだな……エン!! 先にこのトカゲを貰うぞ!!」

『分かった!!』

ん? どこからか、ドラゴンお父さんの声が聞こえてきたよ。

さっきまで僕達の後ろにいたはずなのに、いつの間になくなったんだろう。それに、今どこにいるの?

そんなことを考えながら、岩トカゲの前に立ったスノーラを見ます。

「見せてやる」

スノーラがそう言いながら、スツと手を挙げました。

すると次の瞬間、岩トカゲの腕と足が取れたんだ。

「しゅご! しゅのー、なにちたの?」

僕はすっかり大興奮で、そう尋ねます。

そしたら手に風魔法を纏わせて、ささっと切ったんだって。

それから、スノーラの見えない攻撃で、どんどん解体されていく岩トカゲ。

しっほの先に、お腹部分に、爪に……

そして数分後、岩トカゲはスノーラの魔法によって、完璧に解体されたんだ。



エイデンお兄ちゃんが、こんなに綺麗に解体されている岩トカゲは初めて見たって、とっても驚いていました。

そんな中……

「レン、皆も、これだ」

スノーラが手に持っていた、そんなに大きくないお肉の塊を、僕達に見せてくれます。

「これが、岩トカゲの食べられる部分だ」

え？

これだけ大きな岩トカゲなのに、食べることができるお肉は、たったこれだけ？

僕の顔よりも、ちよつと大きいくらいなんだよ？

「他の部分は、人間やルリ達のように小さい魔獣には、ちよつと身が硬すぎるんだ。我やエン達には問題ないがな。だからこの部位の肉は高額で取引される。お前達が食べやすいように、後でゆっくり焼いてもらうといい。今は我がしまつておこう」

スノーラがそう言って、にっこ笑います。

そんな特別なお肉を食べられるなんて、ご飯楽しみだなあ。

そういうえば、お屋敷がすっかりなくなっちゃったけど、今日はどこでどうやってご飯を食べるんだろう？

後でお兄ちゃんに聞いてみようかな？

と、スノーラがお肉をしまった時でした。

姿は見えないけど、ドラゴンお父さんの声が聞こえてきました。

『スノーラ！ 今日はいくらにしようと思っただが。このまま食べても問題ない魔獣なのか、エイデンに見てもらいたいんだがこつちに来てもらえるか！ 人間達や獣人達は、素材とやらが必要なのだから！』

「ああ、分かった!! よし、移動するぞ」

ゾロゾロ歩いていく僕達。

スノーラを先頭に歩いていって、到着したのはもう一つの大きな魔獣の山じゃなく、小さな魔獣の山の方。

だけど、いつの間にかその小さな魔獣の山は、さらに小さな二つの魔獣の山に分けられていました。

その一つの方の前に、ドラゴンお父さんとカースがいます。

そして、ドラゴンお父さん達がいる方の魔獣の山を囲むように、ゴミが積んであったんだ。

そう、お屋敷の消えたゴミはここにあったの。

「お父さん、何してるの？ どうしてゴミがいっぱいなの？」

『ああ、これからこの魔獣達に使うのだ。どうせゴミだからな、ちょうどいい』

ドラちゃんの質問にドラゴンお父さんは答えてくれるけど……

「ゴミを魔獣達に使う？ ちょうどいい？ 何が？」

僕達が考えているうちに、ドラゴンお父さんに呼ばれたエイデンお兄ちゃんが、小さな魔獣の山の中から、使える素材がないか確認してきます。

「これは羽の部分が使えます。それからこつちのはツノが使えて……」

エイデンお兄ちゃんの話聞きながら、ささつと解体していくスノーラ達。
必要な素材以外は、元の場所に戻してみたい。

『ほう、この鱗も使えるのか』

「はい、それは防具や武器、何でも使えるのでかなり重宝します」

エイデンお兄ちゃんが受け取った鱗を見て、スノーラがこつちを見ます。

「お、これは綺麗な色の鱗だな。ちょうどレン達の人分があるな……お前達、持っておくか？」

「うん!!」

『とつても綺麗!!』

『宝物に加えるなの!!』

透明だけど虹色に光る、とつても綺麗な鱗でした。